スウェーデンの国立公園制度の成立について
～アドルフ・エリク・ノルデンショルドと北欧の自然保護～

親泊　素子
江戸川大学国立公園研究所客員教授

はじめに

ヨーロッパで最初に国立公園を設立した国はスウェーデンである。スウェーデンの地質学者、鉱物学者、北極探検家のアドルフ・エリク・ノルデンショルド（Adolf Erik Nordenskiöld）が1880年に提案したことがきっかけとなったと言われているが、それから約29年を経た1909年にようやく9つの国立公園が設立された。その後、国立公園はゆっくりしたペースで設立されていき、1918年から1962年の間に7カ所、1982年から2002年に12カ所の国立公園がつくられ、現在では30カ所の国立公園がつくられている[1)]。

しかし、国立公園が設立された当初は、「国立公園とは」という確たる基準がないまま、比較的美しい景観があり、観光地としての価値のある地域が選定されていった。また、分布は北部の地域に偏っていた。そこで2008年に政府は新しい国立公園計画を作成し、国際自然保護連合（World Conservation Union）の基準と合致した新たな国立公園設立を目指すようになった。これは2009年にスウェーデンが国立公園設立100周年を迎えるのに先立ち、その見直しが計画されたのだろう。この国立公園計画は更なる公園制度を補足するものとして13カ所の新しい国立公園が計画され、既存の国立公園の面積拡大も検討された。新たに計画された2カ所の国立公園のうち1つは海中公園であり、スウェーデンで最初にできた海中公園である。面積拡大が検討された国立公園のうち、すでに4カ所の増域が行われたが、その中には、1909年に設立された古い国立公園の見直しも含まれている[2)]。

本論では、北欧の自然豊かなスウェーデンがヨーロッパで一早く国立公園を設立した目的は何だったのか、さらには、アメリカの国立公園とのつながりについても調査研究を行った。また、北欧の自然保護に多大な貢献をしたとされる地質学者、鉱物学者、北極探検家であったアドルフ・エリク・ノルデンショルドと国立公園とのかかわりについて特に注目してみた。

I　スウェーデンの国立公園制度について

スウェーデンは立憲君主国家の正式名はスウェーデン王国という、北ヨーロッパのスカンディナヴィア半島に位置する福祉国家として有名な国である。国の面積は約45万㎢で、日本の約1.2倍の面積を持つが、2018年の統計では、人口は約1,022万人で、東京都の人口の約1,300 万人と比較すると、人口密度の割合がいかに低いかをイメージできよう[3)]。

現在、国立公園はスウェーデン環境保全庁（Swedish Environmental Protection Agency）（EPA）が管理をしており、国を代表する傑出した自然を保護し、それらの地域を学術研究、レクリエーション及び観光に資することを目的としている。2020年現在の国立公園面積は約7,000㎢で、国土の約1.6％を占めている。また、他にも13％の保護地域が指定されている。スウェーデンの90％を超す山岳地帯が国立公園となっており、貴重な動植物も生息している。現在、国立公園の数は30カ所で、一番新しい国立公園は2018年に設立されたアズネン国立公園である。中には世界遺産にも登録されている国立公園が3カ所もあり、多くの観光客が訪れている[4)]。

2008年に13カ所の新たな国立公園の設立が計画された時点でのスウェーデンの国立公園の数は28カ所であったが、翌年の2009年にコスター・シャト国立公園（海中公園）ができ、次にできたのが9年後の2018年に設立されたアズネン国立公園である。2020年現在で、国立公園数は2カ所しか増えておらず、2008年に計画された新たな公園設立はさほど進展しているようには思われない。　残りの11カ所のうち、現在、その設立に動いているのが、ゴットランド郡のバテトゥスクとストックホルム郡の南島諸島である[5)]。

表 I-1　スウェーデンの国立公園

	名称	英名	(ha)	設立年	備考
1	アビスコ	Abisko	7,700	1909	
2	アンソ	Ängsö	190	1909	
3	アズネン	Åsnen	1,868	2018	
4	ビョルンアンデット	Björnlandet	1,130	1991	
5	ブラ・ブアーゴ	Blå Jungfrun	198	1926	
6	ダルビー・ソテルスコグ	Dalby Söderskog	36	1918	
7	ジュロ	Djurö	2,325	1991	
8	フォルネボフヤレデン	Färnebofjärden	10,100	1998	
9	フルフジャレット	Fulufjället	38,500	2002	
10	ガルフィタン	Garphyttan	111	1909	
11	ゴッカ・サンドン	Gotska Sandön	4,490	1909	
12	ハムラ	Hamra	1,400	1909	
13	ハパランド・スカルガード	Haparanda Skärgård	6,000	1995	
14	コスター・シャト	Kosterhavet	39,450	2009	海中公園
15	マドゥス	Muddus	49,340	1942	世界遺産
16	ノース・クヴィル	Norra Kvill	114	1927	
17	パジェランタ/バジェランダ	Padjelanta / Badjelánnda	198,400	1962	世界遺産
18	ピーリエカイセ	Pieljekaise	15,340	1909	
19	ソンファレット	Sonfjället	10,300	1909	
20	サレク	Sarek	197,000	1909	
21	スクールフォレスト	Skuleskogen	3,062	1984	世界遺産
22	ソデラセン	Söderåsens	1,625	2001	
23	ストーンヘッド	Stenshuvud	390	1986	
24	グレート・ジョファレット ストゥーア・ムオルケ	*Stora Sjöfallets* *Stour Muorkke*	127,800	1909	
25	ストア・モセ	Store Mosse	7,850	1982	
26	ティブデン	Tiveden	1,350	1983	
27	トフシングバレー	Töfsingdalen	1,615	1930	
28	トリスティック	Tresticklan	2,897	1996	
29	ティレスタ	Tyresta	2,000	1993	
30	ヴァドヴェチャッカ	Vadvetjåkka	2,630	1920	

（出典：Swedish Environmental Protection Agency, 2019）

表 I-2　国立公園候補地

	名前	英名	郡名
1	タヴヴァヴオマ	Tavvavuoma	ノルボッテン
2	ケブネカイセ	Kebnekaise	ノルボッテン
3	バラダレン・シラーナ・ヘラグ	Vålådalen-Sylarna-Helags	イェムトランド
4	ブライクジャレット	Blaikfjället	ヴェステルボッテン
5	バテトゥスク	Bästeträsk	ゴットランド
6	レイボ	Reivo	ノルボッテン
7	ビンデルファレン	Vindelfjällen	ヴェステルボッテン
8	ローゲン・ユトゥルスラッテン	Rogan Juttulslatten	ダーラナ＆イェムトランド
9	コパンゲン	Koppangen	ダーラナ
10	南島諸島	Nämdö archipelago	ストックホルム
11	ザンクト・アンア	Sankt Anna	オスターゴットランド

（出典：Swedish Environmental Protection Agency, 2019）

II　スウェーデンの国立公園の父、アドルフ・エリク・ノルデンショルドについて

国立公園の概念をヨーロッパに紹介した人物として、探検家のアドルフ・エリク・ノルデンショルドの名が挙げられるが、はたしてノルデンショルドは「国立公園」の概念をどこで知ったのだろうか。それを知るためにまずは彼の生い立ちを詳しく調べてみることにしよう。

ノルデンショルドは1832年、当時ロシア帝政の一部となっていたフィンランドの首都ヘルシンキで生まれた。彼のルーツはスウェーデンだが、先祖はフィンランドに移り住んですでに何世代か過ぎていた。父のニルス・グスタフ・ノルデンショルド(Nils Gustaf Nordenskiöld)はフィンランドの鉱山学者で、ノルデンショルドも父の影響で鉱山学者として成長していった。1845年から48年にかけて、ノルデンショルドはフィンランドの国民詩人として有名だったユーハン・ルードヴィーグ・ルーネベリ(Johan Ludvig Runeberg)からギリシャ語を学んだ。ルーネベリは母国の風景を素材として詩を書いていた自然ロマン派の詩人で、ノルデンショルドが小さい時からカントリーサイドや自然に対して強い関心を抱くようになったのは、このルーネベリの影響を受けたからではないかと言われている[6)]。

ノルデンショルドは1849年にヘルシンキ大学へ入学し化学と地理学を専攻した。1853年に父親に同行してウラル山脈へ行き、タギリスク(Tagilsk)で鉄鋼銅山についての勉強をした。そこで化学、鉱山学、動物学を学んだノルデンショルドは帰国して数学物理学の管理員の仕事を手にした。同時に鉱山行政にも携わるようになった。ところが、1855年に酒宴の席でロシア総督府を批判するような発言をして仕事を解雇されてしまった。そこでベルリンにいたグスタフ・ローズ(Gustav Rose)の下で鉱山学の研究を続けた。1856年にヘルシンキ大学よりアレキサンダー研究旅費の奨学金を受けることができたので、その旅費を使ってシベリアやカムチャッカへの地質調査にでかけた。その後ヘルシンキに戻り学問を続けたが、1857年5月の彼の修士号、博士号取得の晩さん会で、再びロシア総督府や当時の知事だったフレデリック・ビルヘルム・フォン・ベルグ(Fredrik Vilhelm von Berg)の政治に対し急進的な批判をして怒らせ、それに対して謝罪をしなかったことで大学の籍を追われ、ついにはフィンランドから追放され、スウェーデンのストックホルムに新たな住まいを見つけざるをえなくなった[7)]。

スウェーデンに行ったノルデンショルドは、1858年に若干26歳の若さでスウェーデン王立博物館の教授に任命され、鉱物学部長となった。同年、彼はオットー・トレル(Otto Torell)北極海探検隊に加わり、スピッツベルゲン(Spitzbergen)島の西海岸の調査にでかけた。それは彼にとって初めての北極圏への旅だった。しかし、彼はヘルシンキ大学への復職を望み、1年で大学へと戻ったが、総督府の監視は続き、大学での成功が絶望的であった。その時にスウェーデン王立科学アカデミーから教授職を持ちかけられ、ノルデンショルドはそれを受けることにした。彼はスウェーデンに渡るのは一時的な事だと考えていたが、総督府の渡航の許可は事実上追放処分と同じであり、1860年にスウェーデンへと渡った[8)]。

1863年にはマンネルヘイム家のナンナ・マリア・マンネルヘイムと結婚、4人の子供を授かった。1861年にも2回目のオットー・トレルの北極海遠征に加わっていたノルデンショルドではあったが、1864年の時はスウェーデン王立科学アカデミーの北極探検隊長としてスピッツベルゲン島への探検航海を行った。また、1868年には小型船ソフィア号で、ロマスベの最東端へ到達した。この頃はまだ船で北極へ行くのは不可能だとされていた時代だったが、これらの航海に対しスウェーデン国王オスカル2世の支援を得ることができた[9)]。1872年にはオスカー・ディクソン(Oscar Dickson)がグリーンランド航海のスポンサーとなり、更に奥地へと航海することができた。しかし、北極圏への到達には失敗してしまった。その時には犬の代わりにトナカイを利用したのだが、スピッツベルゲンのモーゼル湾のキャンプで逃げられてしまった。また翌年の1873年には乗組員の一人が吹雪の中で亡くなるという悲劇にも遭遇した。この年から彼はスウェーデン議会の議員を2年間やることになり、この時期に彼はシベリアの北へとながれる川に関心を寄せ、1875年にロシアの北部に接するカラ海(Kara Sea)、エニセイ川(Yenisei River)を航海して、ノルウエーからエニセイ(Yonisei)へ行くルートを見つけた[10)]。

さらに1878年から79年にかけて行った航海は、彼にとっては最も輝かしい成果を上げた航海であった。1878年6月22日にノルデンショルドは蒸気船ヴェガ号でカールスクルーナ(Karlskrona)を出発し、7月4日にストックホルムへ立ち寄り、その後、イエーテボリを経由して出港した。このヴェガ号は1872年から

73年にかけてドイツのブレーマーハーフェン(Bremerhaven)で造営された43メートルもある捕鯨船で、60馬力の蒸気エンジンをつけていた。この船には21名の乗組員とともに多くの科学者や役人達も乗船していた。ヴェガ号の船長はスウェーデン海軍大尉だったルイス・パランダー(Louis Palander)だった。3隻の船とともに8月にはユーラシア大陸最北端のチェリュス岬を初めて船で廻ることに成功した。しかし、9月28日に北東航路の走破寸前のベーリング海で流氷に囲まれ、アメリカ海軍のデロング隊が救出の為にベーリング海に向かうという事態となった。10カ月も流氷の中に閉じ込められたのだが、1879年7月18日に流氷を抜け出すことができ、その後日本へむかった[11)]。

1879年9月2日に横浜港へ入港すると、すでに日本には彼の事が伝わっており、ノルデンショルドの一行は大きな歓迎を受けた。歓迎式典には皇族、イギリス、アメリカ、ロシアの大使等、100人以上の要人が出席し、ノルデンショルドは明治天皇とも謁見し、講演も行っている。その後、ノルデンショルドの一行は、神戸、京都などの関西方面への観光もして10月21日に長崎港より帰国の途についた。その後、東南アジア、インド洋を航行し、翌年の1880年4月24日にスエズ運河を通りナポリ、パリ経由で帰国した。その成果が認められ、ノルデンショルドは男爵の称号が与えられた[12)]。

ノルデンショルドが「北欧に国立公園を設立する提言」を発表したのは、彼が帰国した1880年である。おそらく帰国してから、あちらこちらで彼の北極探検をたたえる講演や原稿依頼が殺到したのではないだろうか。彼の「北欧に国立公園を設立する提言」を掲載したのは“The Memory of Per Brahe”(ブラヘ記念誌)である。この『ブラヘ記念誌』は故フィンランド総督であったパー・ブラヘ(Per Brahe)伯爵の名誉をたたえ、生誕200年を祝して発行されたものだった。この中で、ノルデンショルドは“Förslag”(提言)というエッセイを書いており、その内容が「人によって自然が破壊されていくことを危惧し、それを救済し、これ以上の破壊をとめるために国立公園の設立を提言する」というものだったのである。これは比較的短いものであったが、ノルディック地方の初期の自然保護の歴史にとっては画期的なものとして位置づけられた[13)]。

ところが、ノルデンショルドが国立公園について述べたものは、このブラヘ記念誌に書かれた“Förslag”(提言)が唯一の文献であった。歴史学者のジョン・マーカス・ハルス(John Markus Hulth)は1902年にノルデンショルド関連の文献を178件リストしたが、それらは彼の北極探検についての他に、鉱山や地理学、化学、海図、その他、科学的な分野に関するものがほとんどであった。ノルデンショルドの若いころの関心は鉱山と地質学であり、遠征に出かけるようになると、その探検隊での体験談が増えてくる。さらに遠征をやめると今度は海図を作成するようになった。彼の手紙、ジャーナル、ノートの記録、航海日誌, 絵画, 写真、地図等も見つかっているが、国立公園に関する記述をした記録は見つかっていない。現在、ノルデンショルド関連の文献はストックホルムにあるスウエーデン王立アカデミーの科学史センターに保管されている。また、彼の2,500人前後の人とやり取りをした約15,000通の手紙もここにコレクションとして保管されている。これらの文通を交わした人たちには、国王といった身分の高い人から、彼の航海仲間、科学者、研究者、ビジネスマン、親しい友人に至るまで多岐にわたっている。なお1848年から58年の文通に関してはヘルシンキにあるフィンランド国立図書館に収められている[14)]。

III ノルデンショルドの国立公園思想

それでは彼の自然保護思想はどのように形成されていったのだろうか？そして、どのような経緯で彼は国立公園の概念を知り、それをスウェーデンで普及させようと思ったのだろうか？

多くの歴史学者はノルデンショルドの国立公園の概念はアメリカのイエローストーン国立公園を模したものであると述べているが、それについてのはっきりした証拠は見つかっていない。ノルデンショルド研究で有名なスウェーデンウプサラ大学のラーズ・J・ランドグレン(Lars J. Lundgren)教授 はノルデンショルドの国立公園の提案の背景にはアメリカのイエローストーン国立公園の設立とジョージ・パーキンス・マーシュ(George Perkins Marsh)の思想の影響があったとみている。さらに、ノルデンショルドが“Förslag”のエッセイを書いた後に、積極的にスウェーデンの国立公園設立運動をしなかったのは、ノルデンショルドが地質学者、鉱物学者、北極探検家として、すでに数多くの活動をしており、自然保護と関連した国立公園の設立に関する提言は彼の活動のほんの一つであった。また、スウェーデンの北部はまだ国立公園のような原生の状態が残されていると考えたからではないかと推測している[15)]。

一方、フィンランドのノルデンショルド研究者のマルティ・ブラフィールド(Martti Blåfield)教授によると、ノルデンショルドのこの哲学はフィンランドの林業従事者だったアントン・ブランクビスト(Anton Blomqvist)の影響を受けたからではないかと述べている。ブランキビストは、ジョージ・パーキンス・マーシュの著作に通じており、特に、1864年に出版した『人と自然(Man and Nature)』の著作の影響を受けていた。そして、その考えを友人であったノルデンショルドも共有していたのではと言われている。それが推測される根拠として、1880年にノルデンショルドが国立公園の設立を提言した翌年の1881年9月にブロンクビストはフィンランド林業協会の会合で、マーシュのニューヨーク州のアディロンダックを国立公園のようにする考えについて紹介していたからである。マーシュは直接国立公園と言う言葉は用いなかったが、“region of American soil”と言う言葉を用いてその土地の保全を訴えていた。マーシュはその公園設立の目的を学術、レクリエーション、動植物の保全の場所として位置付けたが、それはまさにノルデンショルドの国立公園の概念に近いものであった[16]。

フィンランドの歴史学者であるセイジャA・ニエミ(Seija A Niemi)教授はノルデンショルドの『ブラヘ記念誌』(Per Brahes Minne)の中で述べた“Förslag”(提言)に注目をしている。ノルデンショルドは次のような言葉でそのエッセイを始めている。

> 去った世紀に私たちが発明をしてきた数々のものは私たちを取り巻く自然に対してその影響を日増しに大きくしてきている。特に田園地帯は鉄道や電信線で張り巡らされるようになってきた。製材所やその他の小屋等が辺境の森林地に建てられるようになり、多くの人達もそういった土地に入り込んでくるようになった。(…)こういった推移は多くの人々に幸せと福利をもたらし、国の発展を測る目安になるものとなったが、同時に憂鬱な感情がわきあがってくる。将来の世代がわが祖国の土地がどのようなものだったのかをはたして想像できるのか[17]

ノルデンショルドは産業の発展は避けられないものと理解はしていた。また、それが経済的発展をもたらすものであることもわかっていた。したがって、彼は文明の発展を完全に否定するものではなかったが、同時に手つかずの自然がこの発展によって破壊されていくことを心配した。そこで次のような提案をしたのである。

> 北欧の国々には広大な公有地があり、その多くはあまり有効な土地とはなっておらず、ほとんど利益をだしていない。したがって、そういった場所の一画に国の公園をつくっても差し支えないのではないだろうか[18]

この提案に賛同した人たちは北欧の国立公園設立にむけ努力を続け、ついに1909年にヨーロッパ最初の国立公園がスウェーデンに誕生した。彼らはノルデンショルドの提案通り、有効な土地活用がされていない地域を国立公園として選定した。この国立公園設立の先見性こそが、ノルデンショルドの環境観を示すものであった[19]。

ニエミはこのノルデンショルドの国立公園の概念はアメリカの画家のジョージ・カトリン(George Catlin)の影響を強く受けているのではないかと推測している。なぜなら、ノルデンショルドの国立公園の概念がカトリンの述べた概念と大変似ているからである。それはカトリンの『北アメリカ・インディアンの作法、慣習及び状態』“Illustrations of the manners, customs, and condition of the North American Indians(1845)”に書かれている本の内容に近いということである。カトリンはアメリカの西部を1830年代に何度もでかけており、平原インディアン(Plains Indians)を彼らのテリトリー内で描写したことで知られている。さらにカトリンはインディアンが滅びていくことを予知しており、インディアンを保護していくことを訴えていたのである[20]。カトリンはクラーク探検隊に同行した時に、マリポサグローブで探検隊の一行がインディアンを除外して、レジャー、レクリエーションの場所としてこの地域を公園にという考えを提案した時に、彼のみがインディアンも動物もともにこの領内で一緒に生活させながら保全をすることを訴えたのである。同様にノルデンショルドも同じ概念で国立公園の設立を提唱していた[21]。

ノルデンショルドはノルディック地方には何の土地利用もなされていない国有地があり、この地域を手つかずの状態で国立公園として残そうと提案した。それによって、さらに、この地域の歴史や文化をも残して行きたいと考えていた。このようにノルデンショルドのその土地の歴史、文化を含む自然を手つかずのまま未来の世代へ残して行こうとする考え方はカトリンとの共通点が多数ある[22]。

さらに、ノルデンショルドは何度もでかけた北極海遠征の時に知り合った動植物の学者たちの自然保護からも大きな影響を受けている。ノルデンショルドは北極遠征隊の学者や研究者との面識も多く、その中にはヘンリー・ハドソン(Henry Hudson)、ウイリアム・バレント(William Barents)、ウイリアム・スコレスバイ・ジュニア(William Scoresby Junior)などがいた。これらの探検隊員たちはイギリス、ドイツ、アメリカなどからの研究者で、主として気象、水力、地理学的な関心が高かった。彼らはもちろん動植物の減少を心配もしていたが、ノルデンショルド程深く環境問題にまで言及することはなかった[23]。

さらに、1876年にアメリカのフィラデルフィアで開催された万国博覧会(Exposition)の百周年記念にノルデンショルドは審査委員として招待されており、おそらくそこでイエローストーン国立公園についての情報も得たのではないだろうか。国立公園が誕生して丁度4年がたち、おそらくこの展覧会でも保全問題が当時の話題となっていたのではないかとニエミは推測している。そしてさらに彼は滞在中にナイアガラの滝も訪問し、観光で込み合い自然が破壊されている状況を目にして、人間のさらなる自然に対する負の一面を感じたのではないかと推測しているが、ニエミは確たる証拠はあげていない[24]。そこで、著者はノルデンショルドとアメリカの国立公園との接点になるような事柄を探してみた。その結果、次のような事実がでてきた。それは、まず、このフィラデルフィアの万博のオープニングスピーチを飾ったのが、イエローストーン国立公園法に署名をした第18代大統領のグラント将軍だったのである。さらにはこの博覧会にはフェルナンド・V・ハイドン(Ferdinand V Hayden)も参加していたのである[25]。このハイドンは言うまでもなく、イエローストーン探検隊に参加したメンバーの一人で、彼はこの博覧会にジオラマを出展していたのである。写真家のウイリアム・ヘンリー・ジャクソンとハイドンの地質測量チームの一人だったウイリアム・ホームズとが協力してメサ・ベルディの遺跡を立体の粘土で作ったジオラマを出品したのである[26]。このジオラマはコンテストの審査で銅メダルを獲得した。この結果、ジャクソンのアメリカの先住民の写真や記事、レポート等が人々の関心を集めた。おそらく地質学者で審査委員だったノルデンショルドがこの展示を見逃すはずはなく、また、イエローストーンを探検したハイドン地質測量チームと話す機会は十分あったと考えられ、これらの人々と交わることで、ノルデンショルドはアメリカのイエローストーン国立公園設立の話を聞き、かつ大自然に居住する先住民と自然との関係について、自分の国の環境と重ね合わせたのではないだろうか。後にノルデンショルドの息子のグスタフ・エリク・ノルデンショルド(Gustaf Erik Nordenskiöld)がメサ・ベルディの地質調査に参加しており、その石を持ち帰ったことが問題化したが、当時はそれを海外に持ち出してはならないと言う法律はなく、大きな事件へと発展することはなかった[27]。

さらに、ノルデンショルドのベルリン滞在時代には、クリミア戦争(1853-1856)やイタリア統一戦争(1859)が続き、ドイツ諸邦では民族主義運動が高まり始めた時期だった。特にナポレオン戦争によって、祖国統一を望むナショナリズムとあいまって、民俗学への関心が高まった。ドイツの科学的民俗学の創始者でバイロイト博物館の館長でもあったヴィルヘルム・ハインリヒ・リール(Wilhelm Heinrich Riehl)ミュンヘン大学教授は1851年には「ドイツ民俗の自然史」という著書の中で森林や原生地域の保護を訴えていた[28]。またドイツは農業社会から工業化社会への構造変化で、自然環境の改変による景観の保護運動が始まった時期にあたり、彼のいたベルリンも農村から徐々に工業化の影響で都市問題が起こりつつあった。ドイツキール大学の哲学、美学教授だったヒルシュフェルト(Christian C. Lorenz Hirschefeld)が「国土美化」の思想を唱え、国土美化運動が高まっていったのもこの時期であったが、この頃になると、徐々に郷土保護運動、景観保護運動が起こりつつあった[29]。感受性高き青年時代にドイツで生活をしていて、こういった環境の動きが彼の思想に多少なりとも影響を与えていたのではないだろうか。さらに、父親は国際的な鉱山学者として、各国の学者とも交流があり、ノルデンショルドもそういった環境の中でヨーロッパ各地の様々な分野の学者の動きを聞いていたのではないだろうか。

さらに、ドイツのピアニスト、作曲家でベルリン音楽大学の教授だったエルンスト・ルドルフ(Ernst Rudorff)は1889年版のプロシア年鑑(Preussische Jahrbücher)に『近代生活と自然との関係について』"Über das Verhältnis des modernen Lebens zur Natur"の論文を発表した[30]が、その考え方はノルデンショルドのものと共通点をもっている。ルドルフはライン地方の鉄道建設による負の影響を懸念していた。彼は18世紀以来、大変人気の高かった観光地であったその地域の自然美が失われることを心配し、慣れ親しんだ郷土が破壊されていくことに警告を発した。ノルデンショルドも同様の意見を1880年の「提

言」で述べ、歴史的、文化的な風景を含む国土の自然保護を訴えたのである[31]。

IV　スウェーデンの動き

1887年にはじめてノルデンショルドの提言が「国立公園」という言葉で、ノルウェーファミリーブック(Nordisk familjebok)のエンサイクロペディアに掲載された。それにはノルデンショルドが提言した「国は離れた地域に国立公園を設立し、何百年たった後にも、ウイルダネス及び耕作地の形状と同じように今日のスウェーデンの動植物を提示できるようにすべきである」といった内容が解説されていた。エンサイクロペディアの国立公園の定義は「"Nationalpark (rikspark)"とは、私有地で国の特色ある自然が破壊されることから守り、国の天然記念物を守り育てていくことを目的に国が保護する地域」としている。そしてその例として3つの地域をあげているが、それがアメリカのイエローストーン、マリポサグローブ、そしてカナダのバンフ国立公園であった[32]。

ノルデンショルドは1901年に亡くなったが、彼の死から3年経った1904年に再び国立公園が話題にのぼった。それはドイツの植物学者のユーゴ・コンヴェンツ(Hugo Conwentz)がスウェーデンを訪れたからである。彼は自然保護に関する講演を行いノルデンショルドの考えを褒める小論をスウェーデンの文化人類学及び地理学会誌の『ユーミル』(Ymer)に発表した。その中でコンヴェンツはヨーロッパ及びスウェーデンの自然保護に関する事例を挙げ、その最後にノルデンショルドがスカンジナビア諸国の自然保護を訴えた最初の人物であることをたたえたのである。コンヴェンツは1889年以降、スウェーデンを度々訪れており、ノルデンショルドは彼の保護思想にも大きな影響を与えたとされている[33]。

こうして、ノルデンショルドは自然保護の第一人者としての地位を確立したのであるが、スウェーデンにおいては他にも自然保護の先駆者たちがいた。そのうちの一人がビズビー(Visby)の教員だったパー・アーヴィド・セーブ(Pehr Arvid Säve)(1811-1887)、ラトガー・セルナンダー(Rutger Sernander)教授(1863-1931)、そして植物学者のカール・スターバック(Karl Starbäck)(1863-1931)等である。1877年に『最後のカップル』"Sista paret ut!(The last pair out!)"の論文の中で、セーブは人間と動物との関係を定めた新しい法律を制定すべきであることを提言した。ノルデンショルドはスピッツベルゲン(Spitsbergen)への探検を1861年、1864年に実施した際にセーブが北極圏の動物たちが危機に瀕していることを観察したことで彼とも議論していた。自然保護に関するセルナンダーやスターバック等の提言は、ノルデンショルドの重要なエッセイの結果、20世紀の変わり目にその輪郭が描かれた。彼らの発案はノルデンショルドの国立公園に関する考えに基づくところが大きい[34]

同じくスウェーデン・ウメオ大学の歴史学者であるボッセ・サンディン(Bosse Sundin)は、スウェーデン議会においてスターバックがスウェーデンの自然や自然景観を保護する法制度を提案するための質問を行った背景に、コンヴェンツの講演やノルデンショルドのエッセイが多大の影響を与えたと述べている。スターバックの提案は議会で大きく支持され、科学アカデミーでも支持された。実際、アカデミーはその提案についての質問さえ行った。そして1904年9月に自然保護委員会が最初に設置された。そのメンバーの一人にはノルデンショルドの友人であったナソースト(A.G. Nathorst)も含まれていた。委員会は民衆への教育の必要性も強調した。委員会はさらに学校の授業における教育も重視し、学校組織における自然保護に対する興味や関心を深める指導を要望した。これが今日の環境教育へとつながったのである[35]。

最初の国立公園がスウェーデンに設立されたのは1909年である。アビスコ(Abisko)、ハムラ(Hamra)、ガルフィタン(Garphyttan)、ゴッカ・サンドン(Gotska Sandön)、ピーリエカイセ(Peljekaise)、サレク(Sarek)、ソンファレット(Sonfjällets)、グレート・ジョファレット(Stora Sjöfallets)、アンソ(Ängsö)の9カ所が指定された。最初の3カ所はスウエーデン北部に位置し、次の3カ所は中部の地域にあるが、すべてがノルデンショルドの推薦した地域である。ノルデンショルドが推薦したそれらの地域とは「公有地であり、かつあまり優れた土地ではなく、利得を生まない場所」であった[36]。

V　国立公園誕生の背景

ノルデンショルドが国立公園を提唱した背景をまとめてみると、以下の要因が考えられる。

1．幼い時から彼のギリシャ語の教師であった国民詩人、ルーネベリの影響を受け、カントリーサイドや自然の風景に強い関心を抱いていた。
2．地質学者として、地理学だけではなく、林学、動植物の研究者たちとも交流があり、そういった人々を通じて自然保護思想についての知識を吸収

していった。

3．フィンランドの植物学者のブランクビストからジョージ・パーキンス・マーシュ の「人と自然」の著作の影響をもらっていた。
4．北極探検隊の探検家として北極に生息する動物たちの生態とその保護に関心をよせていた。
5．アメリカの画家カトリンの影響を受けていた可能性もある。ノルデンショルドがカトリンのそこに居住する先住民を排除することなく、そのまま住まわせるという発想はカトリンと同じであった。
6．フィラデルフィアの万国博覧会に審査員として招待された時に、アメリカのイエローストーン国立公園の情報などを入手した可能性もある。また、イエローストーンへの調査探検に加わった人たちとの意見交換の影響もあるのではないか。
7．スウェーデンの第二次産業革命による土地の改変、鉄道開発、森林破壊による自然風景の喪失をノルデンショルドは憂いていた。
8．ヨーロッパ各地でおこったナショナルロマンティシズムの高まりやドイツの国土美化、郷土保護運動等もノルデンショルドに影響を与えた。
9．彼の生まれ故郷のフィンランドの独立運動とそれに伴う故郷へのノスタルジアが、彼のスウェーデンだけではない北欧全体の景観保全へのイメージをふくらまして行った。

すなわちノルデンショルドの考え方は、National Park（国民の公園）ではなく、Nation's Park（国の公園）という考え方で、自然、歴史、文化を含む母国の原風景の保全を望んでいた。同時に彼は国有地を国立公園に指定することで私権に影響を及ぼすことはないと考えた。さらに、他の土地利用が有効ではないと思われる土地を国立公園に指定することで、別の経済効果があることも見抜いていた。彼がアメリカの国立公園の概念と根本的に異なっていたのは、アメリカの国立公園が先住民を公園の土地から追い出したのに対し、彼の発想は地域住民をそのまま居住させ保全するというものであった。スウェーデンではこれに観光の発展に関心のある人々が加わり、鉄道の開発等と一緒にこの国立公園設立の動きが加速していったのである。また、当時にあってドイツのコンヴェンツが度々スウェーデンを訪れ、ノルデンショルドを評価し、さらにドイツのルドルフの郷土保護運動等についても知っていくことで、国立公園設立の機運も高まった。また、スウェーデンが実際、開発による森林伐採の危機にも瀕していたことも事実である。

スウェーデンが1909年に国立公園を設立した時期は、ヨーロッパ全体の第二次産業革命による国土の開発、それに伴う自然破壊の危機が各地で起こっていた。ヨーロッパの第二次産業革命による社会の変革は労働者階級の貧富の差にも大きく影響を与え、農業の形態も大きく変化せざるをえなくなってきた[37]。そこから、北欧の今までは人さえ入らない奥地の森林にまで開発の手が伸びてきて、自然の改変が目に余るものとなってきた。したがって、ノルデンショルドの国立公園設立の提案は、単なる北極の冒険家による思いつきの提案ではなく、すでに他の動植物学者達も自然保護の法律を作る法案等も提出しようとしていた。それを察したノルデンショルドが『ブラヘ記念誌』に短いエッセイを書いて国立公園を設立することによる国土の自然保護を訴えたのである。その考えには厳密な意味でのアメリカのイエローストーン国立公園のような公園を意図したものではなく、まだ開発の手が入ってきていない国有地を抑えておくことで、少なくとも郷土の景観を保全できるであろうと提案をしたのである。その風景には昔からの建築物や歴史あるものも一緒に保護をしていこうとする思いが込められており、自然だけでなく歴史、文化、先住民をも含めた貴重な国土の文化景観の保護を提唱するものであった。

おわりに

以上のような要素がからみあって、ついにスウェーデンでヨーロッパ初の国立公園が設立された。ちなみに隣国のノルウエーでもその機運は同じ時期に高まっていたが、フィンランドの政治状況の為に、実際の設立はスウェーデンから遅れること29年、1938年にフィンランドも国立公園を設立させたのである[38]。その後、ヨーロッパ各地でも国立公園運動の機運が高まっていった。ちなみにスウェーデンに続いて国立公園を設立させた国は1914年にスイス、18年にスペイン、そして22年にイタリアの国立公園設立へとつながり、英国、ドイツ、フランス等は全て第二次世界大戦後に国立公園を設立している。その主な理由は民間による自然保護運動が早い時期から始まっていたからではないかと思われる。いずれにしろ、ヨーロッパで初めて国立公園制度を立ち上げたスウェーデンの国立公園思想というものが、アメリカのジョージ・パーキンソン・マーシュやジョージ・カトリンの自然保護や国立公園の概念と、ドイツの国土美化やルドルフの郷土保全活動の影響とが入り混じったものであったことはユニークである。さらに彼はノルディック地方全般の郷土の風景や自然保護を訴えていた裏には、彼の故

郷であったフィンランドが独立戦争で戦っており、また、ヨーロッパ、とくに北欧、バルト三国において民族や国民国家のアイデンティティを求めるナショナルロマンティシズムの動きが高まっていく中で、彼自身の風景の原点ともなったフィンランドを含む北欧の緑豊かな森林の景観を守りたかったのであろう。フィンランド人の強烈なナショナリズムに呼応する形で、ノルデンショルドも彼のナショナリズムを国立公園という形で実現したかったのではないだろうか。

ヨーロッパで国を超えての自然保護運動がその後活発化していった時も、スウェーデンは積極的に参加をしていき、1914年に自然保護の国際助言委員会(The International Advisory Board for Protection of Nature)がスイスのベーゼルに設立された時も最初から参加をしていた。その後も自然保護、環境保全への国際的な動きにスウェーデンは積極的に関与をしていった。そしてついに世界最初の環境国際会議といわれる1972年の「人間に関する国連会議」(UN Conference on the Human Environment)がスウェーデンのストックホルムで開催されたのであるが、この会議もスウェーデンが1968年に開催されたECOSOC(国際連合経済社会理事会)で提案をした結果である。このことからもスウェーデン人の環境に対する関心の高さをはかり知ることが出来よう。第一回国連人間環境会議を開催した国スウェーデンがヨーロッパで最初に国立公園を設立した国であるというのは感慨深い。

引用文献

1) Swedish Environmental Protection Agency, http://www.swedishepa.se/Enjoyingn-nature/Protected-areas/National-Park/ (cited 2020/05/20)
2) National park Facts/History, (http://www.nationalparksofsweden.se/national-park-facts/history)(cited 2020/05/20)
3) スウェーデンの基礎データ/外務省, (https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sweden/data.html#section)(cited 2020/05/20)
4) Swedish Environmental Protection Agency, op. cit.
5) Swedentips.se, Sweden: *Travel Guide and Booking Portal*, http://www.swedentips.se/national parks/ (cited 2020/08/31)
6) Finnish Historical society, *National Biography of Finland: Nordenskiöld, Adolf Erik(1832-1901)*, http://kansallisbiografla.fi/english/person/3569, (cited 2020/05/21)
7) Ibid., p.3.
8) Ibid., p.4.
9) Ibid., p.5.
10) Ibid., p.10.
11) Ibid., p.11.
12) Gale International, *The Gale Review: Adolf Erik Nordenskiöld' – A Great Arctic Explorer of the Nineteenth Century*, p.4, http://review.gale.com/2019/03/18/adolf-erik-nordenskiold, (cited 2020/06/12)
13) Seija A Niemi, (2018b)"*A Pioneer of Nordic Conservation: The Environmental Literacy of A.E. Nordenskiöld (1832-1901),*" Diss., University of Turku, p.34.
14) Ibid., pp.34-35.
15) Ibid., pp.48-49.
16) Seija A Niemi (2018a)"The Historical Roots of A.E. Nordenskiöld's (1832-1901)Conservational Philosophy," *Scandinavian journal of History*, 43:5, pp. 581-600, DOI:10.180/03468755.2018.1430596.
17) Seija A Niemi, (2018b), p.33.
18) Ibid.
19) Ibid.
20) Ibid., p.49.
21) Ibid.
22) Ibid.
23) Ibid.
24) Seija A Niemi (2018b), p.597.
25) U.S.National Park Service, *William Henry Jackson*, https://www.nps.gov/people/william-henry-jackson.htm. (cited 2020/05/29). Thomas H. Harrell, *William Henry Jackson: An Annotated Bibliography [1862-1995]*
Diss., Carl Mautz Publishing, 1995, p.3.
26) Ben Fogelberg (ed..), *Western Voices: 125 Years of Colorado Writing*, Colorado Historical Society, 2004, p.26.
27) Richard H.Wilshusen, "Gustaf Nordenskiöld and the Mesa Verde Region," *Colorado Encyclopedia*, 2019 ed.
28) 北山雅昭 (1990),「ドイツにおける自然保護・景観育成の歴史的発展過程と法」『比較法学』23-2, p.39.
29) Ibid., p.30.
30) Ibid., pp.39-41.

31）Niemi（2018b), p.35.
32）Ibid.
33）Ibid., p.53.
34）Ibid.
35）Ibid.
36）Ibid., pp.53-54.
37）石原俊時(1994)「スウェーデンにおける労働者階級の形成をめぐって－労働組合運動と労働者文化（上)」『立教経済学研究』Vol.48, No.2, pp.135-155.
38）フィンランドは1917年12月6日に独立を宣言してフィンランド共和国を樹立させた。ロシア大公国支配下100年を経ての独立であり、スウェーデンの統治も含めると750年以上の歳月を経ての独立だった。武田龍夫(1993),「物語北欧の歴史」中央公論社、p.163.

参考文献

石原俊時(1994)「スウェーデンにおける労働者階級の形成を巡って－労働組合運動と労働者文化（上)」『立教経済学研究』Vol.48, No.2, pp.135-155.

Finnish Historical Society. National Biography of Finland: Nordenskiöld, Adolf Erik(1832-1901). http://kansallisbiografla.fi/english/person/3569.（cited 2020/05/21）

Fogelberg, Ben（ed)(2004). *Western Voices: 125 Years of Colorado Writing*. Colorado Historical Society.

外務省「スウェーデンの基礎データ」http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sweden/data.html#section.（ cited 2020/05/20).

Gale International.（2019)The Gale Review: *Adolf Erik Nordenskiöld -A Great Arctic Explorer of the Nineteenth Century*. http://review.gale.com/2019/03/18/adolf-erik-nordenskiold.(cited 2020/06/12)

北山雅昭（1990)「ドイツにおける自然保護・景観育成の歴史的発展過程と法』『比較法学』23-3, pp.39-55.

Niemi, Seija A.（2018a）"The Historical Roots of A.E. Nordenskiöld's（1832-1901)conservational Philosophy." Scadinavian journal of History. 43:5, pp.581-600.

Niemi, Seija A.（2018b）*A Pioneer of Nordic Conservation: The Environmental Literacy of A.E. Nordenskiöld（1832-1901)*. Diss. University of Turku.

坂井榮八郎(2003)『ドイツ史10講』岩波書店.

Swedish Environmental Protection Agency. *National Parks of Sweden*.. http://www.swedishepa.se/Enjoying-nature/Protected -areas/National-Park/（cited 2020/05/20).

Swedish Environmental Protection Agency. *National park Facts/History*. http://www.nationalparksofSweden.se/national-park-facts/history.（cited 2020/05/20）

Swedentips.se. Sweden: *Travel Guide and Booking Portal*. http://www.swedentips.se/national parks/（cited 2020/08/31）

武田龍夫(1993)『物語 北欧の歴史』中央公論社.

U.S. National Park Service. *William Henry Jackson*. https://www.nps.gov/people/william-henry-jackson.htm.

Wilshusen, Richard H. "Gustaf Nordenskiöld and the Mesa Verde Region." *Colorado Encyclopedia*, 2019 ed.